

頁	欄外	本文
1	<p>荒振神 牛頭天王 の事を申す公事根元に昔武塔天神南海の女子のもとにかよハせ給ふ時日くれて巨旦将来といふものに宿をかり給ふにかさず、巨旦が弟に蘇民といふものあり、貧しくやつ／＼しかりしかども宿をかしまゐらせ、しくべき筈もなきまゝ粟がらを敷物として粟の供御を奉りしとぞ</p>	<p>① 其後ハ心にもあらで中絶候 <small>そののち こころ なかたえ</small></p>
2	<p>牛頭天王ハ 武塔 天神 とも 申奉る 則素 笈鳴 尊 なり とぞ</p> <p>そのうち八年を経て武塔天神八人の御子を引つれ給ひ蘇民がいへにいたり給ひさきに宿をかしつる恩を謝し給ハんとおほしめしける、其夜他国より暴疫鬼来りて国人をなやまさんとす、天神かねて此ことをしるしめすにより、蘇民に告て茅の輪をつくらしめ給ひ、汝ら家のうち皆この茅のわを身につけをるべしと、をしへ給ふ</p> <p>茅の輪 茅にてつくる 輪 なる</p>	<p>② はゝ其事となく御ゆかしく <small>そのこと</small></p>
2	<p>夫木 みそぎ 川 流す ちのわの ほども なく 過る 月日を めぐり あふ／かな</p> <p>所せき 所もせまき也</p>	<p>③ 思ひ候つるに、珍敷御消息、 <small>おも めづらしきおんせうぞこ</small></p> <p>④ くり返し詠入参らせ候、何方 <small>かへ ながめいりまゐ いづかた</small></p> <p>⑤ にも事なくめて度候、殊に <small>こと たく こと</small></p> <p>⑥ 近き祇苑会になり、物見る <small>ちか ぎをんゑ もの</small></p> <p>⑦ 人々所せきまで田舎よりも <small>ひとごとろ あなか</small></p> <p>⑧ 集参候御事、抑古人の記 <small>つどひまあり おんこと そもこじん しるし</small></p> <p>⑨ おけるを見候へバ、此御神は <small>アツマリ このおんかみ</small></p>

粟がら  
流布の本  
粟がし  
とあるハ  
非

頁 欄外	3	4
本文	<p>蘇民をしへのまゝにちのわをつくり帯ける、その夜大風吹通り、それより其国人ことごとくわづらひ、死するものおびたゞし、たゞ蘇民が家内のミわづらふものなかりしとぞ、のちに天神われハ素さのをのミことなりとのたまひ、今より天下に悪病はやらバ、蘇民将来が子孫なりといひて茅のわをかけなバ、此難をのかるべしとちかひたまひしとぞ</p> <p>⑩ 往古ハ日本に崇候ハざりし、 荒振神にて、渡らせ給ひしが、 五十六代清和天皇貞観 十一年、詫宣の事有て、天下 泰平の守りとならんと有し より、山城の国にうつし、此 会を行しより、天が下に</p>	<p>疫癘 俗にいふ疫病なり、はやり風も同じ、此御神を誠心に信じ奉れバ、此病ひをうくることなし</p> <p>⑪ 疫癘の災難なし、神代に 此神南海に、沙羯羅龍 王の娘を後にせんとて、婚に 出ます時、蘇民将来が家に 宿り給しに、粟がらを座とし 粟の供御を奉りき、其後 八年を経て、八御子の神を</p>

蘇民をしへのまゝにちのわをつくり帯ける、その夜大風吹通り、それより其国人ことごとくわづらひ、死するものおびたゞし、たゞ蘇民が家内のミわづらふものなかりしとぞ、のちに天神われハ素さのをのミことなりとのたまひ、今より天下に悪病はやらバ、蘇民将来が子孫なりといひて茅のわをかけなバ、此難をのかるべしとちかひたまひしとぞ

疫癘  
俗にいふ疫病なり、はやり風も同じ、此御神を誠心に信じ奉れバ、此病ひをうくることなし

4  
沙羯羅龍王

家集

時に

鎌倉

より

右大臣

過れば

民になげきあり

八大龍王雨

やめ給へ

祇園縁起に曰、天竺より北に国あり、九相といふ其国王を牛頭天王と名づく、又武塔天神ともいふ、沙羯羅龍王の女を后とし給ふ、八王子を生む、八万四千六百九十四神の眷属ありといへり、

頁 欄外	5	6	7
本文	<p>②4 具して、蘇民か家におらして、  ②5 一夜の宿をかしつる、恩を報ぜ  ②6 ん為に來たり、茅の輪を  ②7 作りて、蘇民將來の子孫也  ②8 と、いはゞ疫癘の難を遁す  ②9 べしと、誓ハせ給へり、今に至て  ③0 四条京極にて、粟の供御を</p>	<p>大陰神  歳刑神  黄幡神  歳破神</p> <p>③1 奉るは、蘇民將來の、由緒也  ③2 けるとぞ、眷属の荒振、八万  ③3 四千六百五十四神有となん、次に  ③4 堤に、つり殿を御構候由、被仰候  ③5 さもこそと思ひやられ候、御霊  ③6 会過候て、必 罷出、積り候、思ひ、  ③7 胸の塵、かきくづし、申承</p>	<p>豹尾神  歳殺神  水無月 六月の和名</p> <p>③8 候へく候、穴かしこ  ③9 水無月二日 弁のおもと  ④0 大弑のつばねまいる</p> <p>此月あつくしてことに  水泉かれつきたるゆゑ  ミづなし月といふを  略せるなりと奥儀  抄にミゆ  ・此月をミな月と言ハ  神鳴月といふ事かと  りとをはぶけり専ら  雷のなれバいふなり  と万葉考にミゆ</p>

【読み下し】

其後は心にもあらで中絶候まま其の事となく御ゆかしく思い候つるに、珍しき御消息くり返し詠め入り参らせ候、何方にも事なくめで度候、殊に近き祇苑会になり、物見る人々所せきまで田舎よりも集い参り候御事、抑古人の記しおけるを見候えば、此の御神は往古は日本に崇い候わざりし、荒振神にて渡らせ給いしが五十六代清和天皇貞観十一年託宣の事有りて、天下泰平の守りとならんと有しより、山城の国にうつし、此の会を行いしより、天が下に疫癘の災難なし、神代に此の神南海に沙羯羅龍王の娘を後にせんとて、婚に出ます時、蘇民将来が家に宿り給しに、粟がらを座とし粟の供御を奉りき、其後八年を経て、八御子の神を具して、蘇民が家におらして、一夜の宿をかしつる、恩を報ぜん為に來たり、茅の輪を作りて、蘇民将来の子孫なりと、いわば疫癘の難を遁すべしと、誓わせ給えり、今に至りて四条京極にて、粟の供御を奉るは、蘇民将来の、由緒なりけるとぞ、眷属の荒振、八万四千六百五十四神有となん、次に堤に、つり殿を御構え候由、仰せらせ候さもこそと思いやられ候、御霊会過ぎ候て、必ず罷り出で積り候思い胸の塵、かきくずし、申し承り候べく候穴かしこ

水無月二日 弁のおもと

大式のつばねまいる

【大意】

その後は思いがけず便りが途絶えてしまい、何という事はなく心にかかつていましたところ、珍しいお手紙をいただき繰り返し読み入っております。何事もお変わりなくて結構なことです。特にもうすぐ祇苑会が始まり見物客が所狭しと田舎からも集まってきました。昔の人が記したのを見ると、祇園会の神は、昔は日本であがめられていない荒振神でいらっしやったのが、清和天皇の時代の貞観十一年に託宣があり、天下泰平の守護神になったため、山城国（現在の京都）に勧進し、祇園会を行ったところ、世の中から疫病の災難がなくなりました。神の時代、荒振神は南海に神・沙羯羅龍王の娘を後にしようとして、その娘の元へ向かった時、蘇民将来というものの家に泊まりました。粟柄を莖のように敷き、粟飯を奉じてもてなしました。その八年後、荒振神は八の神の子をつれて、蘇民の家を訪ね、「一晩泊めてもらった恩に報いるために来た。茅の輪を作り『蘇民将来の子孫である』といえれば疫病から逃れられるだろう」と約束されました。今日、四条京極で粟飯をお供えするのは、この蘇民将来に由来するということです。荒振神の眷属神は八万四千六百五十四神あるということです。次に（往信で、貴方が加茂川の）堤に、つり殿を御構えになるとおっしゃいました。いかにもその通りだと思いを馳せております。御霊会が終わりましたら、必ず参上して、積る思いや胸中の些事を少しづつ伺いたいものです。

あなかしこ

水無月二日 弁のおもとより

大式のつばねへ